

博士學位論文

論文内容の要旨

および

論文審査の結果の要旨

東邦大学

博士論文要旨

看護学研究科看護学専攻 看護管理学 分野	学籍番号 ND11005 氏名 小林 美雪
論文題目	無床診療所における看護師の安全文化
<p>【研究の背景】</p> <p>無床診療所の安全管理体制の整備は、2007年の改正医療法において義務付けられたが、施設数の多さなどから立ち入り検査や公的機関への事故報告は十分に行われていない。このような現状のなかで、2008年には無床診療所において、点滴の作り置きによる院内感染を原因とした患者の死亡事故が発生している。この事故は看護師により長年続けられ習慣化されたずさんな衛生管理と、医師と看護師、更には看護師同士のコミュニケーション不足が発生要因として報告されている。看護師の安全に対する価値観や認識、職場内での関係性という安全文化の欠如が招いた医療事故であることは明らかだった。全国に9万施設余りある無床診療所の安全の確保は、日本の医療安全における喫緊の課題であり、そこでの看護師の果たす役割はきわめて大きいことが分かる。しかし、医療事故が発生した事例から良好な安全文化を形成するための、前向きな示唆を得ることは難しい。自らが目指し目標にしたいと思えるような看護師の先進的な取り組み事例を示すことが、無床診療所における看護師の医療安全への取り組みを促進するものと考えられる。</p> <p>【研究目的】</p> <p>無床診療所の医療安全に積極的に取り組んでいる看護師の日常の看護業務における言動を、その文脈のなかで捉え記述することにより、潜在的で看護師にもしばしば意識されることのない安全についての価値観や認識、信念等の安全文化を明らかにする。</p> <p>【研究方法】</p> <p>1. 研究方法：研究デザインはマイクロ・エスノグラフィーである。本研究は、無床診療所の看護師チームという「単一の社会的状況」において展開される看護師の言動をインサイダーとして観察し、安全文化の抽出を行うため、このデザインを選択した。</p> <p>2. データ収集と分析方法：フィールドワークによるデータ収集と分析は並行して行った。参加観察での観察メモは、その日のうちにフィールドノートに整理し、インタビューデータからは、逐語録を作成した。そして、フィールドノートと逐語録を熟読し、看護師の安全についての考えや思いが繰り返し現れている場面や、看護師同士や看護師長、院長との関係性が表れている状況などを、その場の文脈を壊さないように取り出し、解釈を加えてテーマを抽出した。テーマを抽出する過程においては、医療安全の研究者と看護学におけるエスノグラフィーに精通した研究者のスーパーバイズを受けながら行った。また結果の解釈にあたっては、テキスト解釈の分野の研究者の助言を得ながら進めた。さらに結果の解釈の妥当性については、情報提供者である看護師長と看護師さらには院長に確認した。</p> <p>3. 研究フィールドと対象：研究フィールドは、地方都市のA耳鼻咽喉科である。対象は、主情報提供者の看護師・准看護師6名と情報提供者の院長である。看護師長や院長は、近年、学会誌や看護雑誌等で院内の医療安全の取り組みを公表し、外部への啓蒙活動を行っている。公表された安全対策は熟考されており、無床診療所の限られた資源を効果的に用いたものだった。</p> <p>4. 研究期間：研究期間は予備調査を含めて約1年1ヶ月である。また、無床診療所の特徴から、季節、曜日、時間を考慮しながらフィールドワークを行った。</p>	

【倫理的配慮】

本研究は東邦大学看護学部倫理審査会の承認を受け実施した（受付番号 24026）。

【結果】

対象とした無床診療所を受診する患者の年齢層は乳幼児から超高齢者までと幅広く、患者数は1日平均150名、多い日には300名にも及んだ。また診療では様々な器械が使用され、侵襲的な治療や処置が数多く行われていた。

結果では看護師の言動に繰り返し表れた現象の意味を解釈し、看護師の安全を確保する姿勢や方法が小テーマとして抽出された。またそれらの小テーマは、看護師が共有していた信念や価値観を示す6つの安全文化のテーマにまとめられた。以下、6つのテーマとそれを構成する小テーマを示す。

1. 基本に忠実は、(1)流れを止めない手指擦式法と流れを止めてでもする石けん手洗い、(2)二人の目で確かめる、の小テーマから構成され、2. 患者のつぶやきを聞き逃さない、の小テーマがあり、3. 言葉を交わすことなく互の意図を読み取るは、(1)絶妙なフォロー、(2)一目でわかる白と黄色のカード、の小テーマから構成された。さらに、4. 柔軟に改善し続ける、の小テーマがあり、5. ミスは我がことは、(1)共有されるミス、(2)間違いを言い合える、(3)未然に防がれた院長のミス、の小テーマから構成された。最後に、6. 強い結びつきは、(1)気遣いと感謝、(2)院長に称賛される看護の技、(3)強みを伸ばす看護師長のもとで動機づけられる看護師、の小テーマにより構成された。

看護師は患者への治療が安全に行われるように、手指衛生や薬剤確認の基本的な方法を忠実にやり、ふと漏らした患者のつぶやきを聞き逃すことなく治療の安全に繋げていた。また看護師は言葉を交わすことなく互の意図を読み取り、絶妙なフォローを行うことで、受診患者数が集中する時であっても、チームで安全な治療を支えていた。さらに、看護師は仕事中に生じる不具合や予測される危険を素早くキャッチし、ミスは我がこととしてみんなで共有し、柔軟に改善し続けるという、再発予防に向けた前向きな姿勢を共有していた。患者の安全を確保するという姿勢は、共通の価値観として、全ての看護師に浸透しており、この姿勢が無床診療所の医療の質を維持し向上させ続けていた。看護師たちが共有している安全に対する前向きな姿勢は、院長の気遣いに感謝し、それに看護の技で応え、強みを伸ばしてくれる看護師長に励まされ、さらに信頼するチームの一員でありたいという思いから生まれた強い結びつきによって支えられていた。これが、この無床診療所の「より安全に」を基本に「より快適に」つながる看護を目指していた看護師の安全文化であった。

【考察】

以上の結果を踏まえて、考察ではこれらの信念や価値観が看護師に深く浸透し、当たり前なものとなっていた4つの安全文化の基本的な前提認識を明らかにした。1つ目は看護師がそれぞれに持っていた「安全を守る強い使命感」であり、2つ目は互に言葉を交わすことなく「チームパフォーマンスを高める暗黙の協調」であった。3つ目は「より高いレベルの安全を目指す志向性」であり、これは『わからなくて壁にぶつかると、みんなで分かるようにする』、『やってみてうまくいかなかったらまた話し合っ、そのとき一番いい方法を考える』、『間違えたことはないけれど、間違えるといけないので』という、安全への自律的な思考や信念・価値観によって構成されていた。そして、4つ目は看護師の安全文化を支えていた、看護師同士、看護師長、さらには院長との「看護師の安全を支える相互信頼」であった。

【無床診療所における看護師の安全文化の醸成への示唆】

基本的な前提認識として明らかになった無床診療所における看護師の安全文化の構成要素は、他の無床診療所の看護師が安全を確保する上でも重要な前提認識であった。一方、「チームパフォーマンスを高める暗黙の協調」のように、安全文化が醸成され成熟したチームだからこそ実現可能な前提認識も見られた。

博士学位論文審査結果の要旨

東邦大学大学院看護学研究科看護学専攻博士後期課程

看護管理学分野 ND11005 小林深雪

論文題目：「無床診療所の安全文化」

指導教員：中原るり子（東邦大学看護学部准教授）

平成 27 年 2 月 9 日、高木廣文教授（主査）、遠藤英子教授、平田省吾教授、中原るり子准教授の 4 名からなる審査委員会が開かれ、学位論文に関する審査が行われた。以下に審査の概要について述べる。

全国に 9 万施設余りある無床診療所の安全の確保は、日本の医療安全における喫緊の課題である。しかし、施設数の多さから立ち入り検査や公的機関への事故報告は十分に行なわれていない。本研究は無床診療所において起きた院内感染による死亡事故が、無床診療所の安全文化の欠如が招いた事故であることに問題意識を持ち実施されたものである。ただし、本研究は問題事例の分析ではなく、望ましい成果を挙げている事例に着目し、資源が十分とはいえない無床診療所において看護師がいかに医療の安全性を確保しているかを 1 年半にわたって現場に密着し記述したものである。

本研究の目的は、無床診療所の医療安全に積極的に取り組む看護師の日常業務における言動を、その文脈のなかで捉え記述することにより、潜在的で看護師にもしばしば意識されることのない安全についての価値観や認識、信念等の安全文化を明らかにすることである。

研究デザインはマイクロ・エスノグラフィーで、無床診療所の看護師チームという「単一の社会的状況」に密着し、看護の現場で展開される看護師の言動をインサイダーの視点から観察したものである。観察メモやインタビューデータから作成したフィールドノートと逐語録を熟読し、看護師の安全についての考えや思いが繰り返し現れている場面や、看護師同士や看護師長、院長との関係性が表れている状況などを、その場の文脈を壊さないように取り出し、解釈を加えてテーマを抽出した。テーマを抽出する過程では、医療安全の研究者と看護学におけるエスノグラフィーに精通した研究者のスーパーバイズを受け、結果の解釈にあたっては、テキスト解釈の分野の研究者の助言を得ながら進めた。さらに結果の解釈の妥当性については、情報提供者である看護師長、看護師、院長に確認した。

研究フィールドは、地方都市の A 耳鼻咽喉科である。対象は、主情報提供者の看護師・准看護師 6 名と情報提供者の院長であり、院長や看護師長は、自院の安全への取り組みを学会誌等に公表し、その内容は医師会等からも高い評価を得ている。

研究期間は予備調査を含めて約1年1ヶ月であり、季節、曜日、時間に偏りがないよう配慮して行われた。なお、本研究は東邦大学看護学部倫理審査会の承認を受け実施した（受付番号24026）

対象とした無床診療所を受診する患者の年齢層は乳幼児から超高齢者までと幅広く、患者数は1日平均150名、多い日には300名にも及ぶことがあった。診療では様々な器械が使用され、侵襲的な治療や処置が数多く行われていた。

フィールドノートや逐語録に繰り返し表れた現象、すなわち看護師の安全を確保する姿勢や方法といった目に見えるものの意味を分析し、小テーマを抽出した。さらに小テーマを看護師が共有する信念や価値観という視点から分析し、独自の安全文化を抽出した。その結果、この無床診療所の看護師は患者への治療が安全に行われるように、手指衛生や薬剤確認の基本的な方法を忠実にを行い、ふと漏らした患者のつぶやきを聞き逃すことなく治療の安全に繋げていた。また看護師は言葉を交わすことなく互の意図を読み取り、絶妙なフォローを行うことで、受診患者数が集中する時であっても、チームで安全な治療を支えていた。さらに、看護師は仕事に生じる不具合や予測される危険を素早くキャッチし、ミスは我がこととしてみんなで共有し、柔軟に改善し続けるという、再発予防に向けた前向きな姿勢を共有していた。患者の安全を確保するという姿勢は、共通の価値観として、全ての看護師に浸透しており、この姿勢が無床診療所の医療の質を維持し向上させ続けていた。看護師たちが共有している安全に対する前向きな姿勢は、院長の気遣いに感謝し、それに看護の技で応え、強みを伸ばしてくれる看護師長に励まされ、さらに信頼するチームの一員でありたいという思いから生まれた強い結びつきによって支えられていることが明らかになった。

以上の結果を踏まえて、考察ではこれらの信念や価値観が看護師に深く浸透し、当たり前なものとなっていた4つの安全文化の基本的な前提認識を明らかにした。1つ目は看護師がそれぞれに持っていた「安全を守る強い使命感」であり、2つ目は互に言葉を交わすことなく「チームパフォーマンスを高める暗黙の協調」であった。3つ目は「より高いレベルの安全を目指す志向性」であり、4つ目は看護師の安全文化を支えていた、看護師同士、看護師長、さらには院長との「看護師の安全を支える相互信頼」であった。これらの基本的な前提認識は、他の無床診療所の看護師が安全を確保する上でも参考になる重要な前提認識と考えられた。

以上の点から、本学位論文は看護管理学における医療安全管理上で極めて新規性に富み、学位規程第2条に定める博士（看護学）の学位を授与することに値するものと判断した。また、申請者は看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な技術および研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査ならびに最終試験に合格と判定した。